

# 「ベルグソン 試論」

中 沢 義 和

## 序

1907年に刊行された「創造的進化」<sup>(1)</sup>はベルグソンの哲学の一応の集大成と見る事ができるであろう。それが扱っているのは生命の問題なのであるが、人間も生物である以上、これを問うことは人間自身を問うこと、更には人間の営みとしての哲学を問うことであった。ここでは人間は自然の総体、生物全体の中に戻されそこからの発現として考察されている。この立場はその後人間固有の問題を問うて書かれた「道徳と宗教の二源泉」<sup>(2)</sup>でも受け継がれていて、ベルグソンはそれを「発生の見地」Point de vue de la genèse<sup>(3)</sup>と呼んでいる。従って創造的進化」は或る意味で哲学の発生の試みなのである。ところで持続や生命の飛躍の概念で知られている彼の哲学そのものを「発生的に」見たらどうということになるであろうか。以下我々は彼の思索をそうした関心の下にながめ、そこに生ずる幾つかの問題を取りあげて批判を試みようと思う。とはいえ、それに似たことは既にベルグソン自身の手によりなされているのであって、「思想と動くもの」<sup>(4)</sup>のために書かれた二部の緒論がこれである。それで我々の考察もとりあえずそこから出発しよう。

## I

緒論の一部でベルグソンは自分の思索を決定的な方向に導いたのは「時間の観念」l'idée de Temps<sup>(1)</sup>の発見であったと述べている。それにふれ同書には次の言葉が見当る。「ほぼ50年前、私はスペンサーの哲学に大いに傾倒していた。ある日私は時間がそこでは何の役にも立っておらず、何もしていないということに気付いた。ところで何もしないものは何物でもない。しかしながら、私はつぶやいた、時間は何物かである。それ故時間は作用するのだ。一体時間は何をなしうるのか。単純な良識は答えた、時間とは一切が一挙に与えられることを妨げるものである。時間は遅延させる、というよりむしろ時間とは遅延 retardementである。従って時間は仕上げの作用でなければならない。とすれば時間とは創造と選択の乗物ではなからうか。時間の実在は事物のうちに非決定性 l'indétermination が存することを証してはいないだろうか。時間とはこの非決定性そのものではなからうか。」<sup>(2)</sup>非決定性は換言すれば予測不可能性であり、更に真の時間の本質は過ぎ去ること、絶対に後戻りしないこと、つまり不可逆性 l'irreversibilitéである。と同時に不可逆性は刻々新しいものの不断の湧出、創造を意味する。これらが互いに含み合い、関連し合って、そこに時間という絶対の作用が存する。それはもはや単なる幻影ではない。「時間は直接に与えられている。」<sup>(3)</sup>ベルグソンの発見は余りに我々に近いところにあった。誰もが有している単純な良識<sup>(4)</sup>が認める「万人の時間」<sup>(5)</sup>である。とすれば、ここにはよほど逆説めいたものがあるわけで、それは各人に直接与えられていながら、

その直接性の故に誰からも忘れられているということ。このことである。結局時間とは著しく逆説的なものである。このため終始時間の反省を通じて深められていったベルグソンの哲学も、多かれ少なかれこの性格を共有している。時間の逆説は先ず我々が通常の認識に依ったのではそれを捕え損うというところに明らかになる。

## II

ベルグソンは時間を絶えず運動と結びつけて説明する。時計によって測られ、反省意識によって表象される時間は、丁度軌跡として空間に表象された運動と同じく、「動かないもの」*l'immobile*である。これに対し動くこと即ち動き *le mobilité* が運動の本質である。時間も亦過ぎ去ることが本質である。不動化された時間は「流れた時間」*le temps écoulé*<sup>(1)</sup>でしかない。真の時間は「流れる時間」*le temps qui s'écoule*<sup>(2)</sup>でなければならない。これは我々が生きることに全面的に身をまかせている折、我々の直接的な意識が体験している儘の時間<sup>(3)</sup>である。ところがこの時間は一旦捉えようとして反省の目差を投げかけるや、停止してしまい、我々の手をすり抜ける。なぜなら直接的意識 *conscience immédiate* が流れる時間と方向を同じくするのに対し、反省的意識 *conscience réfléchie* は逆方向つまり後向きだからである。ここに展開されているベルグソンの、人間の生及び知的能力に関する考えは、彼の哲学の主要な関心であると共に工夫の一つである。一口にいえば彼は人間を何より生物学的見地より考え、その生を直接的（行動）と反省的（認識）の、二重の相の下に捉えようとする。まず人間は「思索する前に生活しなければならない。 *Avant de spéculer, il faut vivre*」<sup>(4)</sup>物質を利用し、社会生活を営む生である。第一義的に人間は道具をもって物質を利用するため知性 *intelligence* を働かせる生物、製作人 *homo faber* である。その限りで知性は人間に自然な傾向である。それは生に役立てることをめざし、一切を人間の側に曲げ、人間化する、従って何らか屈折作用 *réfraction* である。その際手本は無機質の固体としての物質にとられる。空間において相互に区別され並置される通常物質の観念に従って、知性は停止させ、もの化させ、分割する。この動きをベルグソンは「空間化」*spatialisation* と呼ぶ。この場合空間の概念が問題となるだろう。彼にとって空間の絶対的實在性の問題は大きく重要ではない。また物質を拡張 *extension*、拡張りを質と考えて空間から区別する。要するに空間とは物質により暗示されるが、むしろ我々自身の精神の働き、知性及び概念が加わることで極限され、明確化されるところの等質的境域 *un milieu homogène* である。空間は知性の働きであって、「かかる空間は、何よりもまず事物に対する我々の可能的な行動の図式 *le schéma de notre action possible sur les choses* である。」<sup>(5)</sup> 行動の生は専ら実利の方向を向き、生活への注意という枷をはめられている。知性の屈折作用は他面隠蔽作用なのである。そのような知性の作用を具体的に司っているのは言語 *langage* である。言語は記号 *symbol* を用いて対象を処理し、それを不動化する。更に元来社会生活の道具たる性格上、表面的な共通領域においてしか対象に係らない。ところで実をいえばかような知性により行動する時こそ我々は生きることに身をまかせているのであり、従って真の時間が直接

に与えられているのである。しかしながらその知性自身は時間を捉え損う。理由はもう明らかである。知性は時間を演じているのである。それ故ベルグソンは「感じている」 sentir 「生きている」 vivre<sup>(6)</sup> という表現を用いる。知性が時間を認識しようと振り返っても、利用というその構えの前に明らかになるのは単に用立てられる時間。空間化された時間。等質的時間 le temps homogène<sup>(7)</sup> でしかない。人間は真の時間を生きている。しかし生きるとは時間を屈折し、隠蔽することなのである。これが人間の自然的な生の根本的な二重構造である。そこでもし知性の生がすべてだとしたなら、人間は遂に真の時間の何たるかを識らずに終るであろう。けれど知性と並んで、人間は直観 intuition という別の能力を持っている。ここにベルグソンの考えの真に独創的な点がある。彼は芸術家をその模範にとり、彼等の方法を認識の領域に適用しようとする。回顧的な知性の方向が利用 utiliser と支配 dominer だとすれば、直観のそれは共感 sympathiser である。直観の努力によって日常的生の目隠しを取り去れば、直接に与えられた真の時間はその先で直接に捕えられるであろう。過ぎ去って再び戻らない進行そのもの、創造の動きそのものを反省意識によって分析することなく、直観によって共感しつつ、その流れのままに把握しなければならないとするのがベルグソンの出発点である。行動する時の時間を、行動を離れて認識の場へもたらすこと。我々の注意を実践的関心の側面からそらせ détourner、実践的には何の役にも立たないものの方へ向け変える retourner こと。これはもはや自然的態度では達せられない。そこには激しい努力が必要である。なぜなら我々に自然的なものとなっている或る種の思考習慣や知覚習慣、なかんづく言語と縁を絶たなければならないからである。困難の第一は如何にして時間に留まり、時間を内から認識するかということである。実生活から遊離するといっても、それに背を向けることではない。時間の中にこそ絶対はあり、我々は絶対の時間の中にいる。感性と意識の領域外へ超出してしまってはならない。従ってベルグソンの立とうとする立場も次のように極めて微妙である。「一つの意識が持続を測定することなく、唯見ようと欲し、それ故持続を停止させないで把握し、結局自己自身を対象にとり、観察の意識と行動の意識、自発的意識と反省的意識とを兼ねて、自己を凝視する注意の働きと逃れてゆく時間とを近づけ、共に一致させること spectatrice et actrice, spontanée et réfléchie, rapprocherait jusqu'aux faies coïncider ensemble l'attention qui se fixe et temps qui fuit<sup>(8)</sup>」即ち直観は観察と行動とを兼ねるといふ、この積極的な努力を謂うのである。ここで認識を積極的 positiveなものにしているのは本質的時間の直接性である。直接性を直接に把握するためには二重の注意作用、前進しつつ音を聴き分けるという屈曲した、「一種の精神的聴診 une espèce d'auscultation spirituelle」<sup>(9)</sup>を必要とする。結局のところベルグソンにとって哲学とは純粹認識 la connaissance pure の試み、単に識るためのみ識ること、に他ならない。それは何の役にも立たない、まさにその故に極端な努力なのである。実生活 la vie pratique (科学はその延長上にある)<sup>(10)</sup> において人間精神は知性としてひたすら物質の利用に係り、物質の上に自己を全面的に外化させる。こうして自己を閑却した精

神の、精神自身による自己認識を企てるのが純粹認識である。これは或る意味で人間の制約を超える試みである。「哲学は人間の条件を超える努力でなければならないだろう。」<sup>(11)</sup> ベルグソンは行動と純粹認識とをきっぱり区別しようとする。哲学の混乱は大部分行動の領域が認識の領域に勝手な越権行為を犯しているところに起因しており、その橋渡しの張本人は本来身軽で軽々な言語（概念）である。従って努力は言語のヴェールを排して、実在と直接に接触し、「見られる対象と分ちがたい」直接的ヴィジョン *la vision (directe) qui se distingue à peine de l'objet vu*<sup>(12)</sup> に達することから始まる。直観を自己の哲学の方法として最初に自覚的に把握し提唱したのは第二の著書「物質と記憶」<sup>(13)</sup> においてであるが、そこではベルグソンは殊にこの実在との直接的接触という性格を強調している。<sup>(14)</sup> またそれは実践上の関心と社会生活の要求に順応して、解体され *decomposer* 再構成され *recomposer* 変質させられた人間の経験 *l'expérience humaine* の代りに、「精神とその対象がじかに触れ合うところから生れる真の経験」*l'expérience vraie qui naît du contact immédiat de l'esprit avec son objet*<sup>(15)</sup> を求めることだとされる。「しかしまだひとつ最後の企てを試みなければなるまい。それは経験をその源泉にまで求めに行くこと。というよりはむしろ経験が我々の実利の方に屈折して固有な意味の人間の経験になるその決定的な曲り角 *ce tournant décisif* を超えたところまでそれを求めに行くことであろう」<sup>(16)</sup> 言語のヴェールを除去するというだけでは未だ十分ではないだろう。直観は段階を迫って漸進する歩みではないからである。それは長い間の実証的研究の後、或る時一挙に *d'emblée* 果される。かく実生活から純粹認識へは劇的な方向転換の側面を有しているのである。同書には純粹知覚 *la perception pure* の概念が説かれているが、これは知覚（主体 *sujet*）と知覚される対象（客体 *objet*）が一致する<sup>(17)</sup> 権利上存する知覚である。真の経験は我々の常の意識的知覚 *la perception consciente* をこの非人称的知覚にまで近づけ開発することによって得られるであろう。直観とはこの側面において「知覚能力の拡大」*extension des facultés de percevoir*<sup>(18)</sup> である。拡大は日常的生の方向を逆行し、自然の傾向に逆らって行われなければならない。かくして直観の激しい努力は意志の働きとひとつになる。「見る能力 *la faculté de voir* が振り向いて自己自身の上に身を攀り、意志する働き *l'acte de vouloir* とひとつのものでしかなくなるのでなければならないだろう。これは苦しい努力であって、我々は突如として自然を無理強いしてかかる努力をすることができるが、ほんの束の間以上にそれを支えることができない。」<sup>(19)</sup> それ故直観は「単一の行為 *une acte unique* ではなく、無限の系列をなす行為 *une série indéfinie d'actes*」<sup>(20)</sup> である。それら一連の努力を通じ精神はそれ自身の上に身を曲げて自己認識をしようとする。すると精神は自己を先ず時間的な在り方において見出すことになる。ベルグソンが最初に到達したのはいわば意識一時間とも称すべきものである。ところがそれは遂には生命一時間にまで根源を遡る。我々はこの道筋を大まかに辿りながら、そのうちでベルグソンの哲学に本質的な幾つかの問題が生じてくるのを見るであろう。

時間は我々に直接与えられており、それは何より人間意識と緊密に連関している。第一の主著「意識に直接与えられているものに就いての試論」においてベルグソンが企てたのは意識を静的・固定的な従来の空間の場から、動的な時間の場に戻し、把握しようとするのであった。反省の激しい努力<sup>(1)</sup>によって言語の介在を省き、意識を無媒介的に直接に見る時、それは予め与えられた「もの une chose」ではなく、絶えず形成の途中にある「進行 un progrès」として明らかになる。<sup>(2)</sup>並置され相互に排除し合う個別的多様性をなしているのではなく、それらが互いに滲透し合って有機的組織をなし、追々豊富になってゆく生きた統一—これが深部における意識の姿である。即ち意識は純粹の持続のうちに繰り展べられている。純粹持続 la durée pure とは「溶け合い滲透し合って、明確な輪郭もなく、互いが互いに対して外的な関係にあるという傾向は何もなく、数と何の親縁をもたない性質変化の一継続、つまり純粹の異質性 l'hétérogénéité pure」<sup>(3)</sup>である。この生きた持続が実質をなす内的自我 le moi intérieurこそ我々の実在的自我、具体的な生きている自我であり、躊躇そのものを通じて開花する自我である。とはいえこの根底的自我はあくまで自我の深奥のことにすぎない。つまるところベルグソンは自我を二分して言う、「自我は表面で外界に触れて居り、相継ぐ感覚は、互いのうちに融け合っているが、その原因を客観的に性格づけている相互排除性の何物かを留めている。それゆえに表面的な心理生活は等質的境域のうちに操り拵がるのであって、この表象の仕方は我々にとっては大した努力を要しないのである。しかし、内的自我、感じたり熱情に燃える自我、思案したり決心したりする自我は一つの力であって、その諸状態や諸様相は密接に滲透し合い、それらを空間のうちに操り拵げるために互から引き離すや否や、非常な変更を蒙る。けれどもこの一層深い自我は表面的自我 le moi superficiel と共に唯一にして同一の人をなすものに外ならぬから、両者は必然的に、同一の仕方で持続するように見える。」<sup>(4)</sup>ベルグソンにとって自我は意識であり、その自我は階層的に考えられている。ということはそこでは意識は働きの様相としての consciente の面に余り注意が払われず、むしろ自足的内容的な conscience の相の下に見られているということである。意識をそのように見る時、一つの重要な問題が生ずる。それは意識の本質を構成する持続自体も、それに伴って何らか内容的になってしまうのではないか、ということである。<sup>(5)</sup>既にⅡにおいて我々は時間の性格及び時間認識の困難さと微妙さについて考え、また直観によって見出される「意識の直接与件」は「もの」ではなく「進行」だと語った。それを十分よく承知していたベルグソンも、しかるに、その進行を直ちに「純粹持続」「動きそのもの」などと一般的に規定することによって、やはりそこに何かの内実を与えてしまい、かくて時間をそれ自身に留まる内容の如きものに化してしまっただけではあるまいか。そのためベルグソンの意識と時間は一向に働きかけてこず、つまりは発現に結びつかない潜勢態に終わってしまったのではあるまいか。これらの疑いは、以後の彼の思索の歩みを見討してみる時、愈明らかになるであろう。

第一の主著から「物質と記憶」を経て「創造的進化」へ、最後に「道徳と宗教の二源泉」に到るベルグソンの哲学の進展は極く大まかに、1.直観の深化、徹底化と、2.それに伴う持続概念の拡大(内的自我の持続→物質的宇宙の持続→*l' élan vital*→*l' élan d' amour*)、及び3.意識概念の拡大(人間的意識→物質的意識→生命的意識)と要約することができる。精神が直観により自我の奥を掘り進むにつれて、単に人間的なる境域を超え出、非人間的な根底に達する。その究極が*l' élan vital*である。ここにおいて時間は生命の歩みと一致し、意識は生命と外延を等しくする。直観によって捉え、我々自身の内から共感する実在は第一に我々の自我。「時間を通じて流れている姿における我々自身の人格 *notre propre personne dans son écoulement à travers le temps*」である。不可分なものとして流れる実在的時間たる、真の持続である。しかし直観は内的自我の把握のみに限られているわけではない。自己に還り、自己を把握し、自己を掘り下げ、こうして自己の深みを探ることによって意識は物質、生命、実在一般の内部に深く透入してゆくのである。直観はこの意味で「一切の事物を持続の相の下に見ること *voir toutes choses sub specie durationis*」<sup>(2)</sup>である。「ところがもし直観の努力によって持続の具体的な流れの中に一気に入り込むなら、事態は全く違ってくる。…(略)…我々の持続の直観も…様々な持続の連続全体 *toute une continuité de durées*と接触させてくれるのであり、我々としてはそれを下方へか、上方へか辿ろうと試みなければならないのである。どちらの場合でも我々は増々激しい努力によって自己を無際限に拡張することができるし、いずれの場合にも我々は自分自身を超越する *nous nous transcendons nous-mêmes*。第一の場合我々は増々散乱した持続に向って進むが…その究極には物質性 *matérialité*を定義するために我々が用いるつもり of 純粋等質 *le pure homogène*、純粋反復 *le pure répétition*が現れるだろう。もう一つの方向に進んで行けば増々緊張し、収縮し、強度を増す持続に至る。その究極には永遠が現れるだろう。…これは生きている永遠 *éternité vivante*、従って未だ動いている永遠であり、振動が光の中にも見い出されるように、我々自身の持続がこのものうちに再び還るであろう。物質性があらゆる持続の散乱であるように、この永遠はあらゆる持続の凝結であろう。この両極限の間を直観は動き、そしてこの運動がまさに形而上学である。」<sup>(3)</sup>

最初の一步は「物質と記憶」である。「意識に与えられているものに就いての試論」では純粋持続はまだ人間の意識の外には認められておらず、<sup>(4)</sup>意識も人間意識を意味していた。ところが「物質と記憶」においては全体としての物質も持続すると述べられ、「中和化された意識 *une conscience neutralisée*」<sup>(5)</sup>として意識がそれに認められる。尤も前著に暗示がなかったわけでもない。例えば、1.物質は延長 *l' étendu*として空間のこちら、時間の側でとらえる可能性があるということ、<sup>(6)</sup>2.時間と運動とが並べられて考えられ、「絶えず形成の途中にあるということが意識にあらわれるが儘の持続と運動の本質に属」<sup>(7)</sup>し、「運動は1点から他の点への通過たる限りにおいて、一つの精神的総合 *une synthèse mentale*、心的的の従って広りのない一過程である」、<sup>(8)</sup>とされていることなどである。しかし意識はあくまで人間意識で

あり、その範囲内で時間と運動とが考察されていた。物質の持続。物質の意識は考えられていなかった。では直観の努力は如何にしてそこに透入して行くのだろうか。

我々は物質を知覚し、我々の自我は表面において物質と触れ合っている。「物質界の諸状態は我々の意識の歩みと時を同じくする contemporains。」<sup>(9)</sup> (傍点筆者。以下同)

「意識が持続するのであるから、物質界の諸状態も何らかの仕方であらゆる持続に結びついていなければならない。」<sup>(10)</sup> 一杯の砂糖水をつくろうとすれば、我々はどうしても砂糖が溶けるのを待たねばならない。「ところが私が待たねばならない時間は、私の待ちどおしさと、つまり思いの儘に伸縮されえない私自身の持続の或る部分と一致する coincide。それはもはや思考されるもの du pensée ではなく、生きられるもの du vécu である。それはもはや一つの関係 une relation ではなく、絶対的なもの de l'absolu である。」<sup>(11)</sup> 人間意識 (精神) と物質は同時的対応をなしている。この両者の対応は単なる関係ではなく、物質は我々の意識の持続を幾分帯びているのである。このようにして内的時間から事物の時間に移行する一方の道が拓かれるとすれば、もう一方の道は運動の考察を通じて拓かれるだろう。運動は外的なものであるが、その本質である動き mobilité は我々の精神に直接与えられており、しかも例えば腕を動かす折など、我々は運動に内部から触れているのである。「運動に肉迫し、概念を介在させることなく運動を注視しよう。そうすれば運動は単純であって、全体として一体を成すものであることがわかる。そこで更に前進しよう。運動をして、我々自身が生み出す異論の余地なく現実的かつ絶対的な諸運動の一つと一致せしめよう。その時にこそ我々は動きをその本質においてとらえるのであり、またこの動きは不可分の連続性をなして持続する努力と触合する se confond ものであることを我々は感ずる。」<sup>(12)</sup> かくて「もし我々が宇宙を全体として、即ち無機的ではあるが有機的存在と織り合わされたものとして把握しえたならば、我々には宇宙が我々の意識の諸状態同様に新しく、同様に独特な、同様に予見不可能な形を不断にとっているのが見られるはずである。」<sup>(13)</sup>

「物質と記憶」は、それ自体で存在し、しかもそれ自体において我々が認める時の儘に生彩ある姿をしている、常識の認める物質を、イメージの総体 l'ensemble des images<sup>(14)</sup> と措き、人間の身体もその一つ、但し「不確定性の中心 des centres d'indétermination」<sup>(15)</sup> 「行動の中心 des centres d'action」<sup>(16)</sup> という点で特権的なイメージであるとする。その一方で物質は震動 ébranlement 即ち動きに解消され、<sup>(17)</sup> 物質界の全体は具体的延長として質的にとらえられて振り extension とされる。<sup>(18)</sup> こうして物質の持続の観念が生ずる。すると意識ももはや単なる人間意識の鬚を超えて、物質にまで認められる。「延長をもつ物質は、全体として考察すれば、意識のようなものであって、そこではすべてが平衡を保ち、補い合い、中和しているのである。」<sup>(19)</sup> 全体としての物質は「中和化された意識」である。動きを通じて時間と運動が結びつくや、前著の人間意識—持続の関係はここでは物質の意識—物質の持続の関係にまで拡大する。それでは物質と人間意識 (精神) とはどう異なるのかといえば、前者が「記憶力のない意識」であるのに対し、後者は「記憶力がその実質である意識」で

ある点で区別されるのである。(20) 精神の本質は「記憶力 *mémoire*—即ち未来をめざしての過去をそっくりそのまま保存する自動的独立的記憶としての純粹記憶 *le souvenir pur*」(22) 精神も持続し、物質も持続する。両者は持続の、緊張 *tension* と弛緩 *détente* という程度の差、リズムの差に他ならない。(23) 身体をもつ精神としての人間存在は一つの総合であって、それは物質と精神との総合、*image* と *mémoire* との総合、純粹現在と純粹過去との総合、純粹知覚と純粹記憶との総合である。これが人間の具体的持続である。以上の思考において意識と持続は全くの内容と化しており、「物質と記憶」は持続としての時間を単なる動きや変化と同一視している。

「創造的進化」においては持続は生命に及び、時間は生命と結んで、ここに「生命の根源的躍動 *un élan originel de vie, l'élan vital*」(24) という中心概念が生れる。この生命はまた意識一般とされ、生命と意識は外延を等しくすると述べられる。(25) 「およそ何ものかが生きているところには時間の記入される帳簿がどこかに開かれている。」(26) 「物質と記憶」では記憶は人間にのみ認められていたが、今や生物にも認められて「有機的記憶 *mémoire organique*」と呼ばれる。「生物の発達も胚の発達も持続が絶えず登録されることであり、過去が現在のなかに存続することである。従ってそこには少なくとも有機的記憶というようなものが含まれている。」(27) 我々の意識存在は記憶力の働きによって逆行が不可能になり、絶えず変化し増大し続ける持続である。とすれば生物もやはり持続することは明らかである。「宇宙全体と同じように、また個別的に取りあげられた各々の意識的存在と同じように、生きている有機体は持続するものである。」(28) これら個々の生物の持続の基には、それらを産み出した、より根源的な持続があるのであって、それは生命自体である。生命はすべての生物に共通しており、その起源以来同じ唯一の躍動の連続である。即ち生命の根源的躍動である。その起源にあるのは意識もしくは超意識であり、それは物質の下降運動に逆らわれながら高まってゆく上げ潮のようなものである。「生命の根源にあるのは意識あるいはむしろ超意識 *la conscience ou mieux la supraconscience* である。意識もしくは超意識は、火箭 *la fusée* であり、その燃えつきた殻は再び物質となって落下する。更に意識は、火箭そのものの残存であり、燃え殻を貫き、それを照らして有機体たらしめる。」(29) 一方に精神という緊張の極、他方に物質という弛緩の極があって、その間に緊張度を異にする様々な持続が存する、と説明された「物質と精神」の宇宙像は、「創造的進化」においては、一方に物質という「こわれてゆく」下降の不可分の流れ、他方に生命という「できてゆく」上昇の不可分の流れ、の、方向を異にする二つの流れが織りなす運動の世界として描かれる。(30) これら二つの流れは交り合っ、そこに妥協が成立し、一つの共存形態が生ずる。それが他ならぬ有機的組織であり、その最も複雑高度のものは人間である。「人間において、唯人間においてのみ意識は自己を自由ならしめる。」(31) 「この全く特殊な意味において人間は進化の << 末端 *le terme* >> であり << 目的 *le but* >> である。」(32)

こうして直観は人間意識の深みを探求することによって物質の内部、生命の内部へ透入してゆく。一種の心理学的滲透現象 *endosmose psychologique* (33) がそこにあり、我々の持



統の直観は様々の持続の連続全体と接触させてくれる。

つまり全実在は不可分な連続体をなしているのである。この時その実在は持続一般であり、持続の本質は流れること、変化すること、動くこと、である。変化と運動はその下に変化する物や運動体という支えを必要としない。それだけで十分自足し、決して分割されず、変化する「物」には少しも附着しない純粋な変化であり、純粋な運動である。「…内に関しても外に関しても、また我々に関しても事物に関しても、実在は動きそのものである。 la réalité est la mobilité même。」<sup>(34)</sup> それはできあがったもの le tout faitではなく、できつつあるもの le se faisant<sup>(35)</sup> である。即ち生成 le devenirであり、創造 la créationである。絶対的な新しさの不断の湧出、その自らなる現出である。「自ら然らしめる、自発的で自在な流れ」とでも称すべきであって、ベルグソンは「道徳と宗教の二源泉」の中でこれを「能産的自然 la Nature naturante」<sup>(36)</sup> と呼んでいる。それは次のように言われる時の、その根源的時間の謂なのである。「時間は動きである。…時間は自らをつくるものであるのみならず、万象をして自らをつくらしめるものでさえある le temps est ce qui se fait, et même ce qui fait que tout se fait。」<sup>(37)</sup> ベルグソンが純粹認識の試みにおいて把握した純粹時間はまず人間意識を解明し、遂に始源の生命の根底に至らせた。始源に復帰するや、そこに露呈される岩床は、超越的非人間的基盤である。生命はありのままの、無垢の姿をとりもどす。純粹時間はかかる意味での自然時間である。

#### V

しかし、それにしてもそれは単なる動きであり、流れである。「現実的なものとは…流れ le fluxである。それは連続的推移 la continuité de transitionである。変化そのものである。この変化は不可分 indivisibleであるのみならず、実体的なもの substantielでさえある。」<sup>(1)</sup> 確かに時間は流れる、が、その流れる時間は他方「一切をつくるもの」であり、しかもまた「一切を一挙に与えることを妨むもの」である。一切とはすべての個々の存在を、つくる faire とはその都度の実現 réaliser を、つまり形成 former を意味する。時間は流れつつ、その流れは全き発現と開花でもなくてはならないだろう。こう考える時、それ自身のうちに契機もアクセントも欠き、換言すれば分節も構造も明らかでない、単なる動き、流れに終始するベルグソンの時間はよくこれらの連関を満足させようであろうか。彼は言う、「…絶対的なもの l' Absolut は我々のすぐ真近に、或る程度まで我々の内に明らかになる。絶対的なものは我々と同じように、けれど或る側面からすれば、我々以上に無限に自己のうえに集中し、自己のうえに凝縮しながら Par certains côtés infiniment plus concentré et plus ramassé sur lui-même 持続する。」<sup>(2)</sup> これが明らかにしているのは絶対的なものの持続つまり持続一般は自己に充足して内実化し、発現の輝きの代りに潜勢の暗闇をおのれに保存しようとしているということである。結局ベルグソンは時間と運動からその本質である「動き mobilité」を保存するところから出発した。停止点をいくら集めてみても運動にはならず、瞬間をどれほど重ねてみても時間にはならない、運動は運動体

に少しも附着しない動きそのもの、純粹運動である。それはしかし、やはり一つの抽出、抽象に終ってしまったのではないか。le temps qui s'écouleのs'écouleがécoulementになってしまい、le temps = écoulementの方向へ進んでしまったのではないだろうか。つまり陰をもたないs'écouleの輝きの背後に、何かしら実体的な、écoulementの蠢きを認めることになってしまったのではないかということである。時間はそのため余りにも自己に充足することになってしまい、一向動きの様態が明らかになってこない。のみならず、持続は人間意識をも離れて、あたかも独立的な物自体にさえなりかねない。なるほど絶対的なものは人間を超える、というのは正しい。それにしてもその超えるものが人間を通過し、それが通過するのを見まもることによってしか人間は自己を超えるものを触知できない。さればこそベルグソンも内的自我の深奥を探るわけである。直観とは元来この意味で一つのperspectiveであろう。しかるに深奥は文字通り深奥になってしまい、外との接触を欠いた内的自我の暗闇の中で、融合と一致の道筋をたどって持続はどんどん延びてゆく。何か思惟自体の奇妙な絶対運動がそこにはあるかのようなのである。有限なものの中に永遠なものが開示されるという、そのclair et obscurな境は少しも問題になっていない。砂糖が溶けるのを見まもり、待っている我々。砂糖と我々の対応には、ベルグソンの推察するような、流れと流れとの対応以上に、よほど微妙で緊張したものがあると考えられる。彼の哲学にはその意味で認識主観たる自我意識に対する洞察が不徹底であるように思われる。主観一客観を超えたところに、直接与件を求め、真の経験から出発するといっても、経験が示されるのは誰でもない、やはりこの「私」の内である。真の時間たる持続が動き、変化、創造だからといって、宇宙の持続と直ちに融合し、一直線に拡大されるものだろうか。それらはあくまで我々の意識と結びついている限りで持続の様相を示すのであって、その意識さえ全くの内容と化して、物質や生命にまで拡大されるのは果して正当なことであろうか。

不都合さは恐らく彼の認識の理論に由来していると考えられる。行動と観察の二重の立場に立たねばならないとしつつも、実生活と純粹認識をあまりにも截然と区別しすぎ、そのことによってかえって直観の努力を抑揚のない一面的なものにしてしまったのである。その一面性のより深い原因は、彼の生物学的関心の制約であろう。人間の生を「行動」や「実利的生」やの、単に一般的な規定で捉えてみても、明らかにされるのは唯不定形の生のみであって、具体的な人間の生ではない。それは人間の内部にまで立入っておらず、外的な規定に留まっている。要するにベルグソンにはculture, condition humaine, nature humaineに対する同情が稀薄であり、あまりに性急にそれを排除しようとする。このことは言語を社会生活を営む上の道具であるとする、彼の言語観に端的に示されている。勿論彼の意図は人間の生の反省をめざし、それ自身はもはや人間的ではないが、それによって始めて人間が成り立つところの、根源の基底に達することであった。しかしながら人間とは必ずしもベルグソンの考えるように、単なる生物でもなければ、実体的意識でもない。むしろ人間においてすべてが関係し、問題となっている。その意味で人間は一つの「係わりの場」の如きものと考えられる。そうであれば意識は内容とし

ての conscienceよりは、絶えざる関心の在り様としての conscienceの側面がもっと考察されるべきである。ベルグソンはその内部の現場に入り込む必要があったのではなからうか。我々の生の一つ一つの構造を更に丁寧に考察する余地があったのではなからうか。ベルグソンの説く純粹時間、自然の時間、つまり自然の人間はどのように人間の時間即ち人間の自然を明らかにするのか、この課題に答えようとしたのが「創造的進化」の後、実に二十五年を経て刊行された最後の主著「道徳と宗教の二源泉」であるが、結局そこでは人間固有の問題は決して十分に明らかにされたとは言い難いのである。完

註

- 序 1. L' évolution créatrice (1907) 102<sup>e</sup> éd (以下ECと略)
2. Les deux sources de la morale et de la religion (1932) 140<sup>e</sup> éd (以下DSと略) 3. DS 219 4. La pensée et le mouvant (1934) 63<sup>e</sup> éd (以下PMと略)
- I 1. PM2 2. PM102 3. PM116 4. 「物質と記憶」の第7版につけられた序の中でベルグソンは、物質を考察する自らの立場を「常識 le sens communが物質を見る場所」(MM3)と呼んでいる。ベルグソン哲学におけるこれら常識、常識と直観との関係は興味ある問題である。5. PM37脚註
- II 1. Essai sur les données immédiates de la conscience (1889) 120<sup>e</sup> éd. 136 (以下Essaiと略) 2. Ibid 3. Essai 74- 5 4. PM34 5. EC158 6. PM4 7. ESSai90 8. PM4 9. PM196 10. 後期、例えば「思想と動くもの」の緒論二部においてベルグソンは科学に固有な対象(物質)と方法を与え、その限りで实在の根底的な認識が可能であるとする。形而上学と科学はそこでは対等の立場で相補うのである。(PM33, 42-44) 11. PM218 12. PM27 13. Matière et Mémoire (1896) 50<sup>e</sup> éd (以下MMと略) 14. 仮にその対象を内と外に分けて直観を考えると、前者は sympathie avec nous-mêmes (PM182)であり、la vision directe de l'esprit par l'esprit (PM27)である。後者は sympathie avec l'objet (PM182)であり、vision qui se distingue à peine de l'objet vu, la connaissance qui est contact et même coïncide (PM27)である。MMで強調されるのは後者の場合である。15. MM204 16. MM205 17. cf. MM246. 248 18. PM150 19. EC238 20. PM207
- III 1. un vigoureux effort de reflexion Essai96 (d'analyse Essai175) 2. Essai82 3. Essai77 4. Essai93 5. Cf. la continuité indivisible, et par la substantielle de flux de la vie intérieure, PM27

- IV 1. PM182      2. PM142      3. PM210-211      4. Cf. Essai80-81
- 5. MM279      6. Essai71-73      7. Essai 89      8. Essai 182
- 9. PM12      10. Ibid      11. EC 10      12. PM 6
- 13. PM12-13      14. MM 17      15. MM33      16. MM 46
- 17. MM233-234      18. MM 202      19. MM 246-247      20. MM 249-250
- 21. MM 248      22. MM 69      23. MM203, 230-232      24. EC88
- 25. EC 187      26. EC 16      27. EC 19      28. EC 15
- 29. EC261-262      30. EC 246-247, 250      31. EC 264      32. EC 265
- 33. PM28      34. PM 167      35. EC 238      36. DS 56
- 37. PM3

- V 1. PM 8      2. EC298

(哲学(哲学)博士課程三回生)